

連日九州方面の豪雨の被害が報道されている。

五月末から六月には、殆ど降雨もなく早くも夏の陽気で今年は空梅雨かと思っていた。七月の梅

雨明け時期に、遅まきの前線が日本列島を北上し豪雨に見舞われている。特に九州地方の熊本に降る雨は、熱帯のスコールのようだ。大型の台風四号が四月中旬追討ちを掛けたと思つたら、今度は

十六日午前十時十三分、新潟県中越沖地震M6.8である。三年前の悪夢を人々は想い出した。

建物の倒壊の下敷きの死者十名、全壊・倒壊建物は千軒余り、被害は震源地近くの柏崎が中心で、ライフラインは寸断され一万余の住民は、

余震続く避難所で徹夜。設計以上の激震により刈羽原発も六十カ所の被害を受け、放射能汚染に神経を尖らせたが、幸いその心配は無い模様である。

でも安全の確認あるまで当分は再開不能の由。関口芭蕉庵は神田川沿いにある。

江戸時代の芭蕉は、延宝五年(一六八〇)、俳諧修行をしながらこの神田上水(小石川上水)の河川改修工事に参加し、安楽寺に居住後「龍隠庵」と呼ばれた芭蕉庵に住んだと、庵東門の文京区教育委員会の高札案内に記されている。

神田上水は、正に江戸市民の重要なライフラインだった。加賀上野の出稼人の芭蕉が、直接工事の役務を供していた訳ではなく、町名主の信頼と委託を得て、金勘定と帳簿書き書記役の仕事である。言わば百人の工夫差配の現場監督であった。

人の心を掌握し工事に向かわせる腕を發揮したという。この人心掌握術は、後の蕉門を束ねる親分的能力が当時から開花していたようだ。唯誰の紹介でこの仕事を得たかは謎である。

三十年程前に大地震が発生している。

日光東照宮も一部破損したという、慶安二年(一六四九)六月の武蔵地震による川越の大被害や、江戸大名屋敷で多数の死者がでた状況は、江戸下向後、治水家・甲州出身の信章こと親友山口素堂からの伝聞で知つたに違いない。

江戸城の石垣・石壁の破損は十箇所及び、大名家の長屋は修復不能に全壊し、死者の数も数十名に及んだという。被害中に松平薩摩守の長屋九軒や細川家大広間の倒壊も含まれていた。

町屋七百軒全壊、三尺余り地形陥没し、最も被害の大きかつた川越地区では、今の液化化現象と思われる現象も起り、当時地震の規模は、震度M7程度と推定される。東海道の掛川、信州の伊那

地方でも揺れを感じたと文献にあるという。余震は六月七回以上、七月二十回以上、八月十回余、九月四回の記録がある。

北村季吟の縁で小澤太郎兵衛を頼つて寛文十二年(一六七二)二十九歳で江戸に下校し、日本橋本町に寄寓の芭蕉が、神田上水工事期間中にこうした地震に遭遇したかは定かでない。

俳聖芭蕉が、神田上水の浚渫工事に関与したらしい記述に私は痛く興味を抱いた。無名だった芭蕉が何故江戸で知られた存在となつたのか?

三冊の本が、私の興味に拍車を掛けた。一冊は『芭蕉二つの顔』(田中善信著)、一冊は『悪党芭蕉』(嵐山光三郎著)、更に「池西言水の研究」(宇城由文著)である。

芭蕉伝記研究は江戸時代から始まっているが、今日でも謎の部分が多く、様々な書物が刊行されている。伝記研究の多くが芭蕉の晩年を描いており、伊賀上野の農人の次男が俳聖となる以前の空白の四十年を追っている書物は少ない。田中善信著の副題「俗人と俳聖と」の意味は、知られざる

二つの顔の謎を解き明かすものである。

奈良生まれ芭蕉より六歳年下の池西言水は、京都出の高野幽山を頼り延宝期前半(三年。五年)江戸に下る。当時文学大名、奥州岩城平城主内藤義概(風虎)通称風虎の招きで延宝三年四月、東下した西山宗因歓迎の百韻連句を催し、新風を求め

高野幽山、小西似春、松尾桃青、山口信章(素堂)、椎本才磨らの俳人が参加。この後風虎サロンで、言水は、桃青、幽山、信章、才磨らと接触。才磨は、言水より更に六歳年少で大和(奈良)出身。桃青よりは十二歳年少であるから風虎サロンでは末席の存在と思われる。才磨は最若年であったが、

強力な後立の存在を得て独自活動をしていた。芭蕉はこの時三十二歳。同じ日本橋に居を構える幽山や似春の俳諧興行の執筆を務める。執筆とは、連句会で参加連衆の句を式目(ルール)に照らし懐紙に書き留める役目であるが、十年の俳歴の芭蕉の力量は傑出しており、其角、嵐雪、杉風が延宝初期既に蕉門最古参の弟子となつている。

其角、嵐雪の二人は、江戸育ちの奔放不羈な性格で、地道な生活を嫌う伊達や粹を心情とする放蕩者である。こうした弟子をも惹きつけ洒脱だった芭蕉、神田上水の浚渫工事で人心を掌握し処世の才にも長けた芭蕉が、深川転居後に隠遁者の僧に転じたのは大きな謎と言える。

三十七歳の芭蕉は、延宝八年(一六八〇)冬、俳諧の席が開かれる言わば江戸俳諧文壇の中心の場所、俳友の信章、幽山等の親友が近くに居る日本橋小田原町から何故か突然深川に転居している。

一説に日本橋界隈の火事説で、芭蕉は罹災したというのである。果してそうだろうか?

深川転居の理由に大きな謎がある。後に芭蕉庵を人に譲り、元禄二年(一六八九)生涯最大の奥州・北陸の旅「奥の細道」に、随行河

涯最大の奥州・北陸の旅「奥の細道」に、随行河

涯最大の奥州・北陸の旅「奥の細道」に、随行河

涯最大の奥州・北陸の旅「奥の細道」に、随行河

涯最大の奥州・北陸の旅「奥の細道」に、随行河

涯最大の奥州・北陸の旅「奥の細道」に、随行河

涯最大の奥州・北陸の旅「奥の細道」に、随行河

涯最大の奥州・北陸の旅「奥の細道」に、随行河

涯最大の奥州・北陸の旅「奥の細道」に、随行河

涯最大の奥州・北陸の旅「奥の細道」に、随行河

合曾良を伴い出立しているからである。

関口に設けられた堰、大洗堰で取水し、江戸市民の飲料水に使用されたという神田川はその昔「平川」と呼ばれ、和田(杉並区)、落合(新宿区)を流れて関口(文京区)に至り、飯田橋、九段下を流れ、余水は日本橋川となり江戸城の外濠に利用されていた由。小石川との合流点界隈が常に水害で悩まされ、万治三年(一六六〇)の工事で流路を変更し、以後目白台下の関口寄り飯田橋に至る間は江戸川と、飯田橋から浅草橋に至る間が神田川と呼ばれるようになる。

加賀では藤堂藩主の引きがあつたとはいえ、江戸東下したポット出の芭蕉が、幾ら朋友に恵まれたとはいえいきなり立机できたわけではない。深川転居の謎に加え、二つの謎が残る。

資金稼ぎの神田上水の浚渫の仕事を、どのような縁でまた誰の紹介で得たのか？無名の桃青が誰の庇護を得て立机・点者の道を進み得たのか？

芭蕉は、小沢太郎兵衛を頼り江戸下向「帳役」という仕事を与えられ日記を付けている。日本橋船町の名主小澤太郎兵衛(俳号得人)の借家に暮らし、時には信頼を得て名主代行を務めている。「帳役」の実務能力に長けていて、つまり手跡や算勘の心得があつた。手跡・算勘とは「読み書き算盤」である。料理人として食材の購入にもタッチした芭蕉が、算盤ができたのは頷ける。

藤堂藩上野の城東赤坂生れ、父の名は与左衛門、六人兄弟姉妹で、兄と姉が一人づつ、彼の下に妹が二人。母の素性は不明。父の出身地と混同した異説として、伊賀国安押郡上柘植の産説がある。

幼名金作、後に藤七郎、忠右衛門宗房と称す。伊賀時代の俳号は宗房である。父与左衛門は郷士で身分は農民であるが藤堂藩から苗字帯刀と許されていた特殊な農民だったという説もあるが、信憑

性に乏しい。城下町住みの小作人、つまり農人だったとされる。長男半左衛門は父没後、畳屋を営み生計を立てる。

次男に財産分与する余裕のない松尾家にあつて、十代で藤堂良忠(俳号蝉吟)の武家奉公で家を出てゐる。然も芭蕉にはこの頃、桃印という甥の面倒をみなければならなかつた。桃印は芭蕉の姉の子といわれ五、六歳で父と死別、以後三十三歳で病死するまで面倒をみた扶養家族である。

武家奉公では宗房を名乗る芭蕉は何故か蝉吟の脇を付ける等、二歳年長の蝉吟の寵愛を受ける。「源氏物語」「狭衣物語」を蝉吟の感化で読む。最下級小者中間の身分であるが、二十五歳で蝉吟夭折後は、食材購入と料理人に取り立てられたという。蝉吟と廻り合いが芭蕉を運命付けた。

後の北村季吟や西山宗因との出会い、風虎サロンの出入りも無かつた。さすれば別人生を歩いたに違いない。武家奉公で蝉吟の寵愛を得たからこそ、後の芭蕉は生まれたといつても過言でない。

芭蕉が蝉吟に寵愛された理由は何故か？一介の農人の次男、藤堂家藩主の間を取り持ったものが、後の芭蕉を有名ならしめた俳諧だった。しかし関係は俳諧のみと断じて良いのか？蒲柳の質の蝉吟の専属奉公人となり得た理由は、無論天賦の才気を発揮し、格好の俳諧の相手を務め得たからでもあるが、もう一つの関係は僧侶と稚児の関係、戦国大名と小姓の関係、夜伽を務めたのではないか？伽役という説である。つまり蝉吟と宗房は衆道(男色)関係にあつたという。

芭蕉の虚像化粧格化が始まつた頃、藤堂新七郎の家臣、土分の御台所御用人に祭り上げられる扱いとされた。大志を抱いて二十九歳で江戸下向の芭蕉こと桃青は当時失職浪人で、立机する財力もなかつた。資金稼ぎの工事監督だったと理解でき

る。始め、三十五歳で万句興行をして、名を知らしめる必要があつた。それにはそれ相応の金が必要であつたようだ。延宝七年前に行った万句興行の成功によって江戸俳壇に踊りでている。芭蕉は決して艱難辛苦、赤貧の暮らしに耐えて宗匠となつたのではなくかなり羽振りよく裕福だったという。関口上水工事に關しては諸説ある。

1. 水道工事奉行が桃青に設計させた。
2. 杉山市兵衛(杉風)や小澤友次郎(ト尺)らの口入で現場雇人または工事監督の書記となる。
ト尺とは家主小澤太郎兵衛の息子である。

3. 笛吹川疎水事業で、甲州出身の治水家素堂の紹介で桃青も関与したのでこれと混同した。

4. 請負人は、桃青 六左衛門 茂兵衛とあるので、桃青が小澤家の名主代行をした信用でこの仕事を独力でかちえた。深川に転居後にこの仕事を受継いだ二人は何れも名主である。

順風満帆の水道工事の仕事も宗匠の座もすて、頭を丸めた深川転居に關しても諸説ある。

1. 日本橋界隈の火事説で、芭蕉は罹災した。

延宝八年火災は十余町もの大火であるが、界隈に住む杉風、ト尺に罹災したという記述はない。
2. 市井の喧騒と俳諧師生活の俗臭に疲れ、点者生活がいやになった。俳諧師の地位は当時低く、いかがわしい者も大勢いた。

3. 桃青と同居の甥の桃印が、妾の寿貞と駆け落ちした。例えば妾であつても不義密通を犯せば、藤堂藩から密通罪で死罪となる。同居人が出奔すれば周囲の嫌疑の目は免れず、それを隠すために深川へ剃髪して僧の姿となつて身を隠した。芭蕉は何度か 帰郷したが、桃印を連れて帰ることはしていない。晩年芭蕉庵に引取られた桃印は三十三歳労咳で死んでいる。了